

弓切除を行うと、硬膜外腔の血腫はわずかで、硬膜下腔に延髄および上位頸髄を強く圧迫する血腫を認めた。大孔部近傍の骨折直下に硬膜の断裂があり、硬膜外静脈叢からの出血もみられ、この硬膜断裂部から硬膜下腔に出血が進展したものと推測された。術後、症状は改善し神経脱落症状なく退院した。

A-38) 外傷性浅側頭動脈瘤の1例

小田 温・妻沼 到 (新潟県立新発田病院)
秋山 克彦・田村 哲郎 (脳神経外科)

症例は16歳男性。ピッチャーをしていて、打球（硬式球）がライナーで右側頭部を直撃した。直後から右聴力が低下したため当院の救急外来を受診したが、頭部 CT では右側頭部に厚い皮下血腫を認めたのみであった。以後外傷性鼓膜穿孔の診断で当院耳鼻科にて通院加療していた。受傷から8週間後、耳鼻科医が右耳介前上方に1 cm 程の腫瘤があることに気づき試験穿刺したところ動脈性出血が認められたため当科に紹介となった。神経学的には異常なし。腫瘤は柔らかく拍動性で、用手圧迫で消失した。また近位の浅側頭動脈を圧迫してもその拍動は消失した。血管雑音は聴取されなかった。2カ月ほど様子を見たが腫瘤の大きさに変化はなく、自然治癒は期待できないと考え、外頸動脈写にて動脈瘤を確認した後、局所麻酔下で流入動脈と流出動脈を結紮、切離し動脈瘤を en bloc に摘出した。組織学的には内弾性板の断裂が認められ、偽性動脈瘤と判断した。

A-39) 外傷性浅側頭動脈瘤の2例

廣瀬 敏士・新井 良和 (公立小浜病院)
久保田紀彦 (福井医科大学)
脳神経外科

(症例1) 9才男性。平成10年3月7日、転倒し、左前額部を強打した。意識消失や麻痺など認めなかったが、皮下血腫著明。表皮にも軽度挫創認めたが、冷却後、放置していた。3週間後、頭皮下腫瘤は縮小したものの消失せず、当科受診した。3×3×2 cm の腫瘤で、fluid content を容するが、極めて tight で表皮の変色を伴っていた。明らかな pulsation や bruit は認めなかった。直接穿刺すると、clot を混じた動脈血が吸引された。3月30日、全身麻酔下で浅側頭動脈造影。腫瘤が偽性動脈瘤であることを確認し、摘出した。

(症例2) 66才男性。平成10年10月上旬、転倒し、右前額部受傷。直径 1.5 cm の拍動性腫瘤の残存と同部位の痛みを訴えて、11月9日当科受診。MRI にて腫瘤内 intensity の不均一を認めた。浅側頭動脈造影で、動脈瘤を確認し、外来で摘出した。外傷性浅側頭動脈瘤は比較的確な疾患と思われる。文献の考察を加えて報告する。

A-40) 外傷性頸部内頸動脈閉塞症の2例

白崎 直樹・能崎 純一 (公立加賀中央病院)
石井 久雅・久保田紀彦 (福井医科大学)
脳神経外科

第1例は42歳男性、H10/8/8午後1時頃、海で飛び込んだ際に頭頂部を岩にぶつけ近医にて縫合処置を受けた。同日夜になり吐き気があり受診したが CT で異常なかった。8/10朝、右不全片麻痺と構音障害が出現し入院。8/28血管撮影にて左内頸動脈の閉塞を認め、保存的に治療し軽快した。第2例は36歳女性。H10/10/30午後2時頃自動車の衝突事故にて受傷。来院時、意識清明にて四肢麻痺もないが、受傷後の数分の amnesia があり後頭部痛と左頸部痛を訴えるため観察入院とした。翌日の午前2時まで自分でトイレに行け異常なかったが、10/31の朝6時30分に右片麻痺、失語症を呈しているのを発見された。緊急にて血管撮影を施行し左内頸動脈の完全閉塞を認めた。血栓溶解をおこなったが剥離した内膜の flap が再度内頸動脈の閉塞をきたすため、ステントを用いて血管形成を行った。術後4週目の血管撮影で動脈瘤の形成、壁不整を認めなかった。

A-41) 外傷性椎骨動脈損傷による小脳梗塞の2例

吉田 昌弘・大庭 正敏 (古川市立病院)
脳神経外科

頭頸部外傷に起因する椎骨動脈 (VA) 損傷に続発した小脳梗塞の2例を報告する。【症例】1例目は29歳男性。首の関節を捻転して“こきっ”と鳴らした途端にめまいが出現した。1週間後にも同様の行為のあとめまいが出現、耳鼻科を経て当科紹介。来院時 CT で lt. SCA 領域の梗塞を認め、DSA で右頸部 VA (第3および4頸椎レベル) に内膜剥離を思わせる所見を認めた。心疾患、凝固異常などの塞栓症の原因は認めなかった。抗血小板療法と頸部安静で再発なく、6カ月後の DSA